

国際連携サマープログラム2008において チューターは何を得たか

仁科浩美*・安原 薫**

*山形大学国際センター(米沢),

**山形大学大学院理工学研究科機械システム工学分野

What did Tutors Acquire in the International Exchange Summer Program 2008 of the Faculty of Engineering, Yamagata University ?

Hiromi Nishina*, Kaoru Yasuhara**

**International Center (Yonezawa),*

***Dept. of Mechanical Systems Engineering Graduate School of
Science and Engineering*

Abstract

This study analyzes Japanese tutors' (JT) and Chinese tutors' (CT) perceptions and behavior in the International Exchange Summer Program 2008 of Yamagata University, using a questionnaire and interviews. The results indicate that both CT and JT deepened their exchange and tried to emulate each other's strengths through interaction. Though CT helped with the communication between JT and Chinese participants (CP) as an interpreter in many cases, JT sometimes filled in the gaps of CT's Japanese knowledge in order to answer CP's questions. CT, JT, CP, each recognized each other's value. To further the students' performance, it is important that we give more opportunities to provide a good grounding, not only at events or parties, but also in daily campus life.

1. はじめに

2008年7月「留学生30万人計画」の骨子が政府により打ち出され、全国の大学では以前にも増して、さまざまな取り組みが開始されている。しかし、その一方では、留学生数の拡大において、数のみが重視される時代は終わり、いかに海外から優秀な学生を獲得するかの戦略が重要視されている。

その一つとして、2007年から1, 2の大学ではこ

れまでの協定校間での短期語学研修等から一歩進んだ、将来の留学生獲得を意識したプログラムが企画、実施され始めている。山形大学工学部でも2008年に「山形大学工学部国際連携サマープログラム2008（以下、SPと略）」と銘打った、中国の協定校に在籍する学部2, 3年生を対象に、将来の留学生獲得を目的としたサマープログラムを初めて実施した。SPには、大学側の人員として教職員はもちろんであるが、学生スタッフ、すなわち、チューターも12名加わった。これは、通常の長期

間にわたって留学生を支援するチューター制度とは異なり、短期間の間に中国人留学生チューター（以下、CT）、日本人学生チューター（以下、JT）が協定校からプログラムに参加する中国人学生（以下、CP）を迎えるという3者間での相互行為による活動となった。CPらは全員初めての海外であったので、磯貝¹⁾がアドラー（Adler, P.S.²⁾の 'Transitional Experience' を「異文化移行体験」として紹介した、異文化に向き合う五段階の成長過程から言えば、これは第一段階に相当する。つまり、それは、異文化に初めて触れ合い協定校間での短期語学研修等、興奮や幸福感が非常に強い段階であったと言える。従って、「楽しかった」「みんな親切でとても良かった」という感想も当然と考えられる。では、もう一方のホスト校の学生として参加したCT・JTにとって、このSPはどのような意味があったのか。

チューターに関する先行研究は、チュータリングのあり方や制度に関するもの³⁻⁵⁾が多い。本稿と同じ方向から、日本人学生チューターに焦点をあてた研究も若干見られる⁶⁾が、これらの研究はいずれも通常の複数月あるいは年単位で留学生と1対1で関わる関係を対象としたもので、今回のような短期間での複数のグループによるチューター同士の関わりの意義を述べたものは管見の限りま

だない。

そこで、本稿では、JTとCTの意識及び行動に注目し、それぞれがこのSPで何を考え、何を学んだのかを明らかにすることを目的とする。

2. 「工学部国際連携サマープログラム2008」の概要

2. 1 プログラムについて

本プログラムは2008年7月28日（月）から同年8月7日（木）までの11日間実施された。来訪した学生は、学部間交流協定校である、中国の吉林大学、吉林化工学院、東北電力大学、河南理工大学の4大学から3名ずつで、計12名（男子8名、女子4名）である。11日間の日程は、概ね午前には日本語学習及び専門分野の講義、午後は市内文化施設見学、工場見学、日本文化体験等、学外での体験学習、そして、週末はホームステイといった内容である（Table 1 参照）。

2. 2 チューターについて

2. 2. 1 チューター参加の経緯

本プログラムでチューターを配置する理由には次の二点がある。第一点目は、来訪する学生への事前に質問紙調査を行ったところ、日本人学生と

Table 1 SP Schedule and Tutors Arrangement Planning

	7/28 (mon)	29 (tue)	30 (wed)	31 (thu)	8/1 (fri)	2 (sat)	3 (sun)	4 (mon)	5 (tue)	6 (wed)	7 (thu)
9:00		orientation	orientation		orientation			engineering lecture	engineering lecture	presentation	
		Japanese class	Japanese class	Kajikawa Campus	Japanese class					(b)CT-JT	send-off
10											
11		engineering lecture	engineering lecture	visit president Mt. Zao	engineering lecture	free time		preparation of presentation (a)CT2, (b)JT4	preparation of presentation (a)CT2, (b)JT4	closing ceremony	(a)CT2
12	at airport	lunch with senior students	lunch					Japanese culture Beting, SCBA	lunch	lunch party	(b)JT
13	moving										
14		Introducing student clubs and campus tour	visit city hall, visit cultural places	visit factories	visit laboratories				preparation of presentation (b)CT, JT	free time	
15		(a)JT4	(a)CT2, (b)JT4	(a)CT2, (b)JT4	(b)CT	Home-stay ↓					
16	arrival				(a)JT4		Home-stay ↑	Chinese night preparation (a)CT5, (b)JT			
17	orientation 1		Japanese culture Kimono					Chinese night (b)CT, JT			
18			(b)CT, JT								
19	welcome party (b)CT, JT		Fireworks								
20			(b)CT, JT								
21	orientation 2 (a)CT1										

 activities with tutors

(a): sharing roles

(b): on a voluntary basis, option

の交流、及び、在籍する留学生との交流を希望する意見があったためである。そして、第二点目は、日本人学生にとっても非日本語母語話者と日本語以外の言語で接するという国際感覚を意識する絶好の機会ととらえたためである。応募にあたっては、学内から学年や課程を問わず広く募集したが、JTについては、そのほかに英語に関心のある学生サークルや、海外や国際交流に興味や関心のある学生の情報を持つ教員にも呼びかけ、周知を図った。CTについては、中国からの留学生を中心に周知を行った。採用に際しては、筆者らが面接を行い、応募動機、外国人との接触経験¹⁾、英語または中国語使用能力、発表補助のためのパソコン使用能力等について尋ねた。チューターの人数については、中国人同士の会話に終始せぬよう、できるだけCPがJTと接触の機会を持つように、JTの数をCTより多く設定し、最終的にJT 7名とCT 5名の参加を得た。JT及びCTの内訳をTable 2に示す。

2. 2. 2 チューター参加活動

チューターは午前の専門講義・日本語授業及び

週末のホームステイ以外の活動に参加した。プログラム開始前にJT・CT一堂に会してのミーティングを実施し、顔合わせと期間中の担当活動を決定した。チューターの配置としては、CP3、4名のグループにJTが1、2名、必要に応じてCPがつくというグループ構成を基本とした。その理由は、1)個人による負担を軽減するため、2)グループ行動をすることで生まれる会話のインターアクション(interaction)とピア(peer)による補い合いを期待したからである。

参加を予定したチューター数はTable 1に示したとおりである。参加の形態は、(a)役割が明確に確定している担当者としての参加と、(b)特に役目は発生しないものの、任意での希望者自由参加としたものがある。JTは(a)としての活動参加が7つ、CTは8つあり、各チューター間で分担した。(a)と(b)をあわせた1人あたりの活動参加項目数は、JT一人平均11.8、参加時間は32.8時間、CTの場合は、それぞれ7.4、21.4時間であり、任意の活動にも積極的に参加していたことがわかる。また、この参加時間には、行事の前後の準備や後始末の時間及び自由行動による接触時間は含まれ

Table2 Tutor Background Information

	J T (7)	C T (5)
sex	male 4, female 3	male 3, female 2
Grade	undergraduate 2 postgraduate 5 (master course 5, doctoral course 0)	undergraduate 1 postgraduate 4 (master course 1, doctoral course 3)
Tutoring experience	yes 1 no 6	yes 1 no 4
Overseas travel experience	yes 6 (aim : travel・home-stay・ volunteer activity・ internship) no 1	yes 1 no 4 (except Japan and China)
Language ability	TOEIC score less than 300 1 300-400 1 400-500 2 500-600 1 600-700 1 no score 1	Japanese ability (self evaluation) intermediate 1 lower advanced 2 advanced 2

1 本稿では「接触」を、第二言語習得研究における用法に準じ、「人と人とが対面し、コミュニケーションを行うこと」と定義する。

ていないので、実際はこの計算上の時間より長い時間が共有されているものと思われる。

また、チューターの参加を自主的なものにするため、サークル訪問（後に、サークル紹介とキャンパスツアーに変更）の計画・実行と、「中国の夕べ」の食事準備についてはJTとCTに任せた。

2. 2. 3 通常のチューターとの相違点

1.で前述したとおり、今回のチューターと世話をしてもらうチューティー（tutee）との関係は一般に存在するチューターとチューティー関係とは異なる。Table 3にその相違点を示す。最も大きな違いは、時間の濃密さと関わる際の人数の違いである。SPの場合は、短期間集中で接触時間を持つことができ、多忙ながらも充実感が得られやすいと思われる。また、その目的も見学・体験という意味合いが濃く、通常の学業支援とは異なることや複数で取り組めることから、外国の学生を迎えるという緊張はあるものの、チューターが抱える負担度はSPのほうがやや軽いと推測される。

3. チューターへの調査

調査はSP終了約1か月後の9月中旬から下旬にかけ、質問紙による調査(附録1)と、質問紙に基づく半構造化面接方式のインタビューにより行い、12名全員の回答を得た。質問紙調査では、主に(1)参加の動機、(2)同じ属性を持つグループ（JTで

あればJTの同属グループ）内での人間関係、(3)異なる属性を持つグループ（JTであれば、CT、CP）に対する意識や見方、(4)CT・JT・CPが共に活動することの意義、(5)SPによる学びや収穫について尋ねた。インタビュー時間は、一人20分～57分と個人差があるが、平均44分である。インタビュー内容は、回答に対する補足及び関連質問や具体例に関するものである。インタビュー時は、参加したCT・JT・CPの氏名を各属ごとに並べたシートを見せながら、接触の様子を語ってもらった。インタビューは、本人の許可を得た上で、ICレコーダーに録音し、文字化したものを分析データとした。データは数値処理が可能な部分もあるが、対象者が少数であるため、あくまでも参考数値にとらえ、質的なアプローチから考察を行う。

4. 結果と考察

本稿では、まず、CT、JTの順に同属内での人間関係構築の様子、及び、異なる属性グループとの関わり合いを、分析・考察した。そして、CT・JT・CP 3者間の全体的な関係を調査から現れたキーワードとともに図式化することを試みた。

4. 1 CTからの視点

(1) 参加動機

CTの主たる参加動機は、「国際交流への興味関

Table3 Differences between General Tutors and SP Tutors

	General (in the case of Yamagata University)	S P
Period	Long (generally, from April to February.) Twice/a week, about 4 hours (in the faculty of Engineering)	short (11days) time of tutorial activity average JT 32.8 hours, CT 21.4 hours
Number tutor : tutee	1 : 1	more than 1 : more than 1
Nationality	Japanese tutor or native tutor	Japanese tutor and native(Chinese) tutor
Role	study support, advice for living, interpreting and other communication support	support for living and SP activities. It is possible to enjoy the program in the same position as tutees.

心」「参加者への手助け」(各3名)、「大学の役に立ちたかったから」(2名)(複数回答)であった。

「国際交流への興味・関心」「大学の役に立ちたい」という動機については、CT自身が交流したいということではなく、同国の学生を受け入れる立場にたった学生として、日本人とCPとの円滑な交流を願う気持ち、あるいは、通訳者として大学に奉仕・貢献できればというホスト校側に属す学生の献身的ともいふべき思いから出たものである。具体的なアンケート記載及びインタビューでの発言を以下に示す。〈 〉部分は筆者による補足である。()中のCT後の数字は、チューターナンバーである。

- ・「CPと学校のこととの国際交流に翻訳〈通訳〉で手伝えるかなと思って」(CT03)
- ・「山大がもっと有名な大学になるように、自分が所属する〈大学だ〉から、山大が有名だと光栄だから」(CT04)

(2) CT同属内での関係

① チームワーク

CT5名は、1名を除き、これまで大学が提供する同じ住居を使用した経験を持ち、面識は互いにある。そのためもあってか、チームワークは5名全員が「良かった」と回答した。しかしながら、これまで同じ建物に住んでいる同じ国出身の人という捉え方だったところから、以下のようにより深く相手を観察することができたようだ。

- ・「xさんは遊んでばかりの感じがしてたけど、結構真面目な面も見た」(CT01)
- ・「すっかり打ち解けた。今までは同じところに住んでいるというだけ。普段は留学生とわかれば、挨拶する程度。今回のイベントでもっと親しくなった」(CT04)

また、居住場所を共にしないCTも交え、「〈SP終了後〉オリンピックの開会式を皆で見た」(CT02)といった交流も起こったことがわかった。

② 同属内の他メンバーから学んだもの・得たもの

同じCTである他メンバーから学んだものについては、通訳時の日本語力の高さをあげた回答が見られ、自分も「頑張らなければならない」と身近な目標を目の前にし、刺激を受けた様子がか

がえる。

(3) JTとの関係

① 期間中及び現在の交友度

話す機会は5段階評価中(1:全くない-5:とても多かった)、平均3.8であった。JTとの交流については、「その場限りで終わった」とする回答は2名、「学外でも一緒に遊んだ」2名、「メール交換をした」3名、「私的な話をした」「今も連絡をとりあっている」各1名であった(複数回答)。

「その場限りで終わった」とする回答については、SP終了後は夏季休暇期間だったことも起因していると思われる。特別一緒に行動することはないが、学内で会えば、挨拶する程度の関係は保たれているとの回答がほぼ全員よりあげられ、一定の関係は維持されているようである。また、「学外でも一緒に遊んだ」と回答した中には、複数のJTを自分のアパートに招いて余暇を楽しみ、交友関係の拡大を図った者もあり、その積極性には個人差が見られる。

② JTから学んだもの・得たもの

JTから学んだものについては、仕事への取り組み方、連絡方法の違い、性格的な特徴をあげた者が多い。

- ・「終始一貫。人によって違うけど、やっぱり日本人のほうがまじめだと感じた。責任感がある」(CT01)
- ・「日本人の学生はまじめで責任感がある。中国人はだいたいの感じがある。サークル紹介するとき、細かいプログラムを作ったのがびっくりした。細かいと思ったけど、それやっただけから順調にいったと思う。(中略)やっぱりCTは〈電話で〉よく連絡するけど、JTたちは連絡するのを遠慮してるのかなと思った」(CT03)
- ・「JTはほとんど中国語わからないけれども、熱心にCPと話してくれて、日本人のやさしさを感じた」(CT04)

このように、文化背景が異なる者同士が実際に一つの物事を共に行うことで、共通点・相違点が見えてくるものがある。体感を通して自ら考えることが非常に大事なのである。

その他には、JTと会話を交わすことにより、自分と異なる専門の学生がどのように研究・生活をしているかを知った者や、学年が上のJTに研究に関する相談をした者もいる。これは、SPに関する公の話題を交わす関係から、個人レベルでの関係性が一步深まった例と言え、SPがもたらした波及効果と考えられる。

(4) CPとの関係

① 期間中及び現在の交友度

話す機会は5段階評価中（1:全くない-5:とても多かった）平均4.4であった。CPとの交流については、「その場限りで終わった」はゼロで、「私的な話をした」「学外でも一緒に遊んだ」各1名、「メール交換をした」「今も連絡をとりあっている」は5名全員であった。「今も連絡をとりあっている」その内容は、中国の大学の新しい動き、本大学も含む日本への留学について、CPが開設するHP内での情報交換といったものであった。

② CPから学んだもの・得たもの

CTにとって、学部2、3年生のCPは年下の学生であり、いわば同国の後輩という位置づけであるが、プラスの刺激となったものには、積極的な行動態度や英語力があげられた。

- ・「性格について、前向きなこととか。（略）活発だと思った。私の2、3年のときは、将来のことが心配だったけど、もう少し楽観的なイメージがある」(CT01)
- ・「CPはしっかり自分の考えを持っている。自分のときは、将来について結構迷ったりしていたが、＜CPは＞意志が強い」(CT03)
- ・「英語を使っただけの交流や発表をして、その英語の能力は自分より高いかもしれない。（中略）英語をもっと勉強しなければならないと思った」(CT04)

また、日本での留学が長期にわたっているCTにとっては、中国の最新流行語や、中国での大学生活等、中国についての新情報の獲得は新鮮な刺激であったようだ。

- ・「私たちが知らない新しい言葉を使っていた。＜未体験の＞中国の大学生活を聞いて、新情報を得られた。学部生だけだと日本のほうが

厳しいように感じられた」(CT04)

さらに、5歳程度の年齢差があるCTからは、CPとの接触を通じて感じたこととして、物事の考え方等において、現代の中国の若者との世代間の差、あるいは思考の差が指摘された。

- ・「5歳違うと結構違う。第一に、（私は）お金があっても全部使わないが、この人たちは、全部使っていたようだ。将来の夢が大きい。世界も視野に入れている。安定（志向）ではないような気がした」(CT02)
- ・「今の大学生は私の時代と違うことを感じた」(CT03)

CTにとって、CPは世話をする対象であったはずであるが、同時に、今、現在の中国事情や20代前半の大学生の思考を知る存在であったと言える。

(5) CT・JT・CPの関係

CT・JT・CPの三者が存在することの意義をどうとらえるか尋ねたところ、大きく3つの点から回答が得られた。第一にあげられた存在意義は、JTとCPとの英語によるコミュニケーションが成立しなかった場合、CTが介入することでコミュニケーションが成り立つということである。CTの場合、自己の存在を通訳者、つまり、自分が自ら前に出るというより、JTとCPとのコミュニケーションを補助する者としての認識が強く見られる。そして、自分が絡むことで、問題が解決できる充実感、あるいは、通常と異なる力関係を楽しんでいたことがインタビューから裏付けられた。また、ある程度日本に馴染んでいることで、通訳にも中国人からみた解説をつけることができるのもCTの強みと言える。

- ・「CPの人たちとJTが結構話しているのを聞いた。困った時は、CTが助けた。そういう役割は楽しかった。問題あるとき、自分が中に入って解決するのが楽しかった」(CT04)
- ・「JTとCT、教える側と教えられる側の立場が反対になるのが面白かった」(CT02)
- ・「＜CPは＞JTと英語使ってもうまく伝わらないことがあった、そこらへんちゃんと通訳とかしてあげて。＜CPには＞日本人の生活習慣とか文化とかちょっと理解できないこともあるし」(CT05)

さらに、JTとCPとのやり取りを、過去のCT自身の経験の再現であることを回顧しながら、傍観者的に見る楽しみもあったようだ。また、CTにとっては、CPが聞こうとすること、JTが教えようとする事の両方が手にとるようにわかる一方で、両者の考え方の違いを客観的立場から知ることにも意義であったようだ。

- ・「JTとCPが聞きたいこと、教えたいことが両方わかって結構楽しかった」(CT01)
- ・「JTとCPの会話を聞いて、中国人と日本人との考え方の違いを感じた」(CT03)

三者が会する第二の意義は、CTとCP間でのコミュニケーション時に、言語的には問題ないが、日本に関する質問で内容に関する知識がなく返答に困ったときに、CTがJTに質問することで、CPの疑問を解決するという事例である。

- ・「答えの内容がわからないとき、もっと詳しい〈情報が必要な〉ときにはJTにCTが聞いた」(CT01)
- ・「CTは日本にいてもわかってない部分がある」(CT05)

第三の意義は、異なる背景・認識度を持つ三者が一つの共通体験をすることの面白さである。CTからは、「食」の文化体験を通し、JTが二つの文化における共通性を知ることができたという気付きが述べられた。

- ・「イベント的な日本の伝統文化に触れ合うこと。CPにとってもいいと思うし、自分ももう一回参加してもいいかなと。〈今回のそば作りだと〉餃子の皮が作れるとこういうふうにはそばも作れるんだとJTが感じるから両方にとっていい」(CT05)

4. 2 JTからの視点

(1) 参加動機

JTの主たる参加動機は、「国際交流に興味・関心があったから」(5名)、「先生の勧め」(4名)、「英語の実践練習がしたかった」(3名)「中国語の実践練習がしたかった」(1名)であった(複数回答)。CTの回答と比較すると、個人的な理由による点が特徴と言える。また、今回、交流する相手

国が中国であったことから、以下のような不安と興味とが交錯していたことが判明した。

- ・「歴史の問題もあって若い人がどういうふう考えているのかわかるといいなあという興味があった。中国から来る若い学生が日本人のことをどう思っているかなということが心配だった」(JT01)
- ・「中国人留学生の人って、あんまり会ったことがなかったので、反日とかあるじゃないですか。〈そういう人は〉来ないと思ったけど、その辺があったので」(JT06)

実際には、歴史的な問題を話題にすることは互いに避けていたようであるが、このような不安は本キャンパスに中国からの留学生が多数いるにも関わらず、交流の機会がなかったために起きた心情とも言え、本学における日頃のキャンパス内の身近な国際交流の度合いの少なさが露呈した。

(2) JT同属内での関係

① チームワーク

「とてもよかった」とする意見が86%(7名中6名)と、大勢を占めたが、インタビューからはJTを中心とする企画・実施について、責任が特定のJTに偏った様子が見られ、取り組む姿勢には温度差が感じられた。

- ・リーダーの役目を担ったJTのコメント
「リーダーの仕事を他の人が理解していなかった」
- ・リーダーに従った立場のJTのコメント
「リーダーがいてよかった。〈私は〉ついていこう的な人だったんで」
「リーダーが率先して事細かに指示を出してくれたので、チームワークはよかった」
「〈リーダーに〉まかせすぎたかなあという感もあり、もうちょっと学生でシェアしてもよかったかと。(略)のよかったほうの人間なんで」

今回のSPは、昨年経済産業省が産業人材の確保・育成の観点から打ち出した「社会人基礎力」²として提唱する「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」を養うのに非常によいトレー

2 詳細は下記URLを参照のこと。http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/

ニングの機会ともとらえられるが、ホスト校のJTとしてチームで動くという点からは、まだまだ意識面でトレーニングを必要とする点があると言えるだろう。

② 同属内の他メンバーから学んだもの・得たもの

学んだものは大きく2つに分けられた。一つは、国際交流に関心を持つ学生が集まったことにより、海外経験の情報交換、語学に対する熱心さに関するものである。もう一方は、一人の学生として、進路・学業に関する情報収集であり、先輩からインターンシップの経験等を聞いた者がいた。

そのほかには、来訪したCPのことを思い、ホスト校としての活動準備に熱心に取り組むJTの姿に、これまでの何をするにもなんとかなるさといった甘い考えを反省したというコメントや、活動に臨む際の下準備の大切さを他のJTから学んだという回答があった。

今回のJTは学部2年から修士2年までが混在して活動していたが、「初めは何をしていいかわからない状態でしたが、だんだん連帯感が生まれ、もっとこの仲間と何かしたいと思えるようになった」(JT02)という言葉が示すように、先輩・後輩を必要以上に意識することもなく、徐々に連帯感を持っていったようである。

今回の場合、海外渡航の経験や外国語の流暢さにおいては、学年の差はあまり見られず、学年が低い者であっても先輩学年のメンバーに情報を提供するといった場面が見られた。また、その反面、後輩学年のJTが先輩学年であるJTに今後の進路等について情報提供を受けるといった場面もあり、相互の情報発信・受信の関係により、次第に信頼関係が構築されていったようである。チームで「前に踏み出し」何かを創り上げるといった点では十分でなかった点もあるが、互いの長を尊重した上で、良好な人間関係を構築しようとした点においては、一定の成果が評価できると思われる。

(2) CTとの関係

① 期間中及び現在の交友度

話す機会は5段階評価中（1:全くない-5:とても多かった）、4.1であった。期間中は「私的な話」

もし、「学外でも一緒に遊んだ」者も半数いた。私的な話は、何か活動をしながら、その最中に交わしたものであり、話すために場を設けるということより、何か同じ目標に向かって共に行動している過程で、言葉を交わすほうが自然に交流を深めることができるようである。

また、所属する研究室に留学生が在籍するJTからは、SPをきっかけに研究室の留学生と話し始め、親近感が持てたという報告もあり、今回の経験が転移あるいは拡大され、生まれた波及効果と言えるだろう。

② CTから学んだもの

日本語と中国語の二ヶ国語使用に関する尊敬の念を表すコメントが多く聞かれた。

- ・「普段留学生は日本語で話しているが、CTにとって日本語は第二外国語であることを改めて感じた。第二外国語での勉強と実験は並々ならぬ努力が必要なのであろうと感じた」(JT02)
- ・「みんな自分が生まれた国じゃないところで自分と全然違う言葉をしゃべる人としゃべろうとして、勉強したり実験したりしてるんだなと考えたら、＜自分は＞やりたいけどそんなに簡単にできることじゃないと思って」(JT03)

これらのコメントは、CTと身近に接して感じたところから出てきたコメントであり、CTの現状をJT自身に置き換えることで、外国語を学ぶ苦勞、ひいては留学生が抱える言語面でのハンディキャンプについて理解を示すものである。

(3) CPとの関係

① 期間中及び現在の交友度

話す機会は5段階評価中（1:全くない-5:とても多かった）平均4.2であり、CTとほぼ同じ数値となった。CPとの交流については、「その場限りで終わった」はJTもCT同様ゼロで、学外でも一緒に遊んだ」1名、「メール交換をした」5名、「今も連絡をとりあっている」は2名であった。

「今も連絡をとりあっている」の2名は、CTが「全員」であったのと比較すると少ない。また、その内容がチャットによるたわいもない話である

ことからすると、CPは留学に関する情報等、重要度が高い情報については、CTから得ていることが推察される。

②CPから学んだもの・得たもの

学んだものは3つに分けられた。一つ目は、見学時や、サークル紹介時などに非常に多くの質問が出たことから、学ぶことへの貪欲さ、積極性である。2つ目はパワーポイントや英語力等のスキルの高さ。3つ目は中国の学生生活に関する情報である。CTの寮生活とJTのアパート暮らしといった住環境の違いや、休憩時間の違いはJTにとっても驚きであったようだ。

今回、来日したCPらは、協定校側が推薦した学生でもあり、非常に優秀な学生であったため、意欲も学力も高い学生の参加を得た。数ある大学の中の数校ではあるが、海外のレベルを知る非常によい機会であったといえ、JTにとってはよい発奮材料となったと思われる。JTの回答の中には、「パワーポイントなどは教えるどころか私よりうまく、負けていられないと思った」(JT02)という言葉もあり、JTの今後に期待したいところである。

(4) CT・JT・CPの関係

CT・JT・CPの3者が存在することの第一の意義は、CTが通訳してくれることによるコミュニケーションの成立である。「JTとCPの言葉の壁をなくしてくれる最も重要な役割だと思った」(JT07)が言うように、CTが存在することによって得られた情報は、「日本にいただけでは考えられなかったことや、中国について学ぶことができた」(CT03)と自分の力だけの情報獲得よりは、質・量ともに高いものがあったことを示唆している。また、JTとCPとに起こる誤解が、両方の文化を知るCTによって解決されることをあげた回答もあった。しかしながら、その反面、CTを経由しなければ、自分の心情が伝達できないもどかしさも覚えていたようである。

- ・「英語ができなかったので、CPと話すとしたら、CT経由。(略)3人で話題を共有することが多かったが、話しているうちにCT-CPになることもあった。CT経由を考えると、

英語で直接話せればと思った」(JT02)

4. 3 CPをとりまく関係

4.1, 4.2で上述された各関係をキーワードとともに、図式化したものをFig. 1に示す。

CT内、JT内では、それぞれ意外性の発見、情報交換が行われている。互いに対し思うことは、CTからJTへは熱心さや責任感があることを感じている。一方、JTは、異国で暮らす言葉の苦勞を思い、尊敬の念でCTを見ている。また、CPについては、どちらもCPの積極性に目を見張るものを感じている。そして、JTからCPへの話しかけは基本的には、CTが通訳となって、補助し、3者がコミュニケーションを成立させているのであるが、場合によっては、JTが日本に関する情報を教えることや、JTが漢字やジェスチャーを交え、CTなしにコミュニケーションを成立させることもあることがわかった。また、日本人には何の不思議もないことがCPの目に疑問に思えるときには、CTがその疑問を察知し、両方の文化の橋渡し役になり、CPに情報を提供することがわかった。

4. 4 SPによる変化

実施期間がわずか10日余のプログラムではあったが、外国及び外国人に対する意識変化と語学学習についての意識変化をCT、JTそれぞれに尋ねた結果は、以下ようになった。

(1) 外国及び外国人に対する意識変化

JTからは、中国に対するイメージの変化、先入観・偏見を持たずに個人として接することの大切さ、海外を訪れることへのより強い願望、欧米中心からアジアへの視野拡大といったコメントが寄せられた。

CTからは、JTのように国や人に対する意識変化は見られなかったが、今回のCPの経験のように、短期で日本以外の国を訪れたいという海外渡航の希望が語られた。

(2) 語学学習についての意識変化

語学、特に、英語の能力を高めたいという意識は、CT・JTともにほぼ全員(11名)に見られた。JTの場合は、常日頃から必要性は感じてい

たが、その必要性、海外の大学生との比較をきっかけに、より強く奮起しようとする意気込みが感じられ、中にはすでに実行に移した人もいた。

- ・「英語をもっと話せるようになりたいと思い、少しずつTOEICの勉強をしている」(JT02)
- ・「もっと勉強しなきゃいけないと思った。みんな<=CPらは>私たちが知らない単語をいっぱいしゃべってた。海外の大学生は私たちよりペラペラなんだと思った」(JT03)

また、これまでNative Englishしか耳にしていなかったJTからは、中国なまりの英語と日本語なまりの英語で互いになまりながら話したことが非常に楽しかったという経験も語られ、英語の多様性にも「気づき」が見られた。英語の必要性は実感できたと思われるが、今回の経験を通し、英語を話すことが国際交流なのではなく、多くの人と自分の意思をダイレクトに伝え、交流するためには英語というツールが便利であるという意識

が、多くの学生に認識されたのではないだろうか。

一方、CTの場合は、中国語でもコミュニケーションは通じていたわけであるが、CPに触発され、専門の国際大会口頭発表などにおいて英語でさらに流暢に話したいという思いが高まったとする者もいた。また、CTでは、日本語能力の向上を挙げたものも3名ほどいたが、通訳の場が多かったことから、「日本語の尊敬語、謙譲語の使い方や専門用語になるとまだまだ」(CT05)といった担当者ならではの自己改善点の発見も見られた。その他として、JTでは、英語重視だった考えから、「他の国の言葉にも関心を持った」(JT03)といった意見も複数見られた。

これらのコメントは、実践でいかに通用するか、身を持って体験した者だからこそこのコメントであり、コミュニケーションがなかなか成立しない歯がゆい経験を持つことや、流暢に外国語を使用する身近な手本を知ることが一歩前進するための大

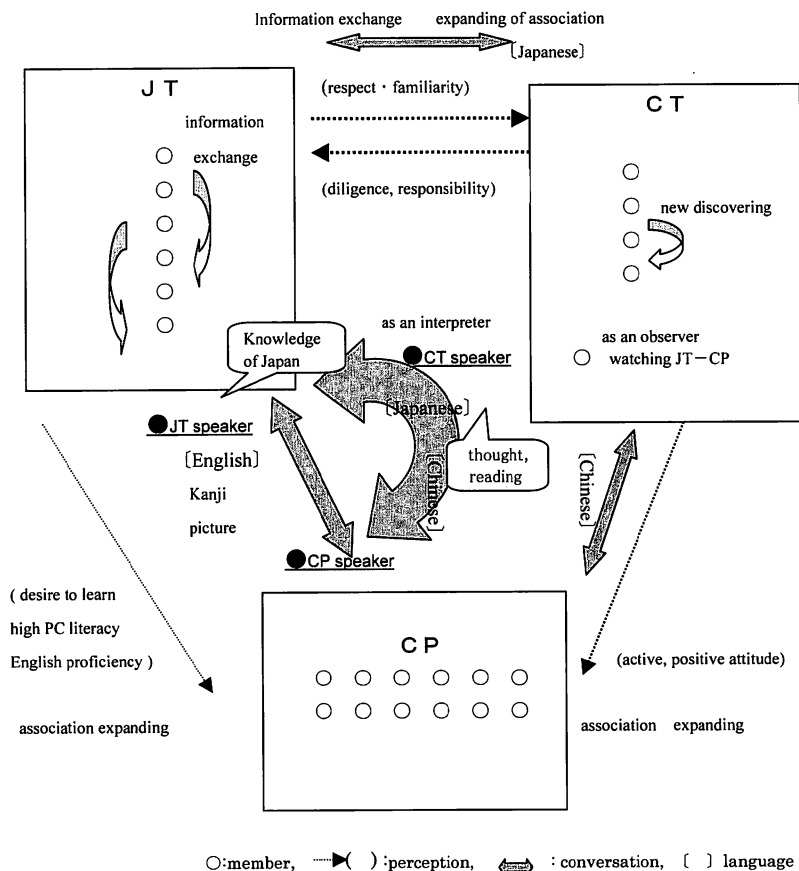


Fig.1 Communication interaction

きな糧となるものである。

4. 5 CTとJTがSPに参加した意義

総括的に10日余のプログラムを通しての各自の収穫について尋ねたところ、CTは初めて試みた通訳の経験や、教職員の準備の取組みから、プログラム企画時に通信手段や交通手段等の細かなところまで相手の立場に立ち、思いやる大切さを知ったこと、初対面の人とコミュニケーションを図る力を習得したこと等をあげた。他方、JTについては、外国に対する目の向け方が欧米だけではなくなくなったこと、交流を交わした国がまた一つ増え、人的ネットワークの拡大を実感したこと、先入観・偏見を持たないようにする心構えが備わったこと等があげられた。

CTについては、これまで研究室の中の行事等において先頭に立って活躍するのは、日本人学生という場合が多かったようで、留学生が主体的に動く今回の活動には、通訳や翻訳に挑戦するといった初めての経験ながらもやりがいを感じていたようである。JTについてはもともと国際交流には関心の高い学生らではあったが、より広い視野で、固定観念にとらわれず、人間・国や地域を理解する必要性を感じたようである。

また、インタビューする筆者側からは、CPの存在を通し、周囲の留学生への気遣いも示すことができたJTや、CPに的確な指示を出し、皆をまとめようとしたCTの姿にも以前と異なる頼もしさが見られ、これらもSPによる成果と認識することができるだろう。

5. まとめ

SPの成果を学内から参加したチューターに視点をおき、彼らにとってどのような意味があったのか、質問紙調査及びインタビューを通し、考察した。その結果、交流・学生間の関係性という点からは、JT同士、CT同士、さらにはJT-CT間でも情報交換や意外性に関する気づきが見られ、活性化が進んだ。また、JTとCPとのコミュニケーション時には、通訳としての役割を認識したCTが両者の調整役として振舞っていたことが明らかとなった。しかしながら、日本に関する知識を十

分に把握していない場合には、CTはJTの力を借りて情報を伝達するといったように、三者が不足箇所を補い合うことでコミュニケーションを成立させていたことがわかった。

1対1で関わる通常のチューター制では、チューターの主な役割が留学生の通訳や授業・生活サポートになることが多いが、これに対して、複数のグループによるチューター制では、チューター自身も他のチューターからサポートを得たり、他のチューターとの情報交換により見識を広められること等、協力や気づきといった点では、短期間でも密度の濃い国際交流になることが判明した。

また、コミュニケーションツールである言語の点からは、今回来日したCPの英語力のレベルを知り、CT・JT共に語学を学ぼうとする意欲が掻き立てられると同時に、留学生の日本語を駆使する苦勞にJTが理解を示す等、得るものは非常に大きいと言えよう。

今回のようなCTとJTが一定の期間チューターを行うことは、プログラム実施期間中の時間的な拘束はあるものの、同じ日本人に英語力に関して触発される、一般の留学生に対する見方が変わるといった交流終了後の学生の国際交流の意識に対する波及効果は大きいのではないだろうか。しかも、学内にCT・JTメンバーが存続するということから、向上しようとする意識は通常より継続しやすいのではないかとも思われる。

国際交流に対して興味を示す学生は、本学内においてはまだ少数と言えるかもしれない。今回の学生の国際交流経験を見ると、参加学生のほとんどが他の機関での経験がきっかけと答えており、学内でこのような場が提供されているとは言いがたい。今後は、在籍する留学生との接触を有効に活用し、異なる言語や文化背景を持つ人々とより日常的に触れ合える取り組みが必要である。

謝 辞

質問紙調査及びインタビュー調査に快く協力してくださった中国人チューター及び日本人チューターの皆様に心よりお礼を申し上げます。

参考文献

- 1) 八代京子,町恵理子,小池浩子,磯貝友子:異文化トレーニング:ボーダレス社会を生きる,三修社, pp.249-255 (1998).
- 2) P. S. Adler: The Transitional Experience :An Alternative View of Culture Shock, vol.15, pp.13-23 (1975).
- 3) 松本久美子:留学生支援とチューター制度の改善,長崎大学留学生センター紀要,vol.11,pp.75-90 (2003)
- 4) 水本光美・池田隆介:理工学部留学生にとって効果的なチューター制度,専門日本語教育研究, vol.6, pp.55-61 (2004).
- 5) 岡益巳,坂野永理:日本語研修生に対するチュータリングの在り方—ボランティア・チューターへのアンケート調査を踏まえて—, 留学生交流・指導研究, vol.10, pp.105-111 (2007).
- 6) 水本光美・池田隆介:日本人学生は学部留学生のためのチューター活動を通じて何を学んだか,北九州市立大学国際論集, vol.3 , pp.79-86 (2005).
- 5-2. CTとは仲良くなれましたか。(5段階尺度による選択)
6. CTとのつきあいの中で,何か感じた(考えた)ことはありますか。(記述)
- 7-1. CP(協定校からの中国人参加者)と,話す機会がありましたか。(5段階尺度による選択)
- 7-2. CPとは仲良くなれましたか。(5段階尺度による選択)
8. JT, CT, CPと一緒に活動して,良かったと思えることはありましたか。(選択→記述)
9. 他のJTから何か得たもの,学んだもの,考えさせられたことはありますか。(記述)
10. CTから何か得たもの,学んだもの,考えさせられたことはありますか。(記述)
11. CPから何か得たもの,学んだもの,考えさせられたことはありますか。(記述)
12. SPでの経験を経て,次の事柄に変化はありますか。
 - (1) 外国や外国の方々との関わりに対する考えに,変化は・・・
(Yes,No選択→記述)
 - (2) 今後の自分自身の語学学習の取り組みについて,変化は・・・
(Yes,No選択→記述)

附録 質問紙における質問項目と回答形式

質問紙の質問項目と回答形式は以下のとおりである。なお,この質問項目はJTに対するものであり,CTに対する質問では,質問4,5,6,9,10の「JT」が「CT」に,「CT」が「JT」になる。

1. 参加のきっかけは何ですか。(選択)
2. サマープログラム(以下,SP)実施前,プログラムに対するあなたの期待度はどの程度でしたか。(5段階尺度による選択)
- 3-1. 2.の期待度と実際の結果とを比較すると,どうなりますか。(選択)
- 3-2. その理由は?何かエピソードがあれば,それも教えてください。(記述)
4. JTの中でのチームワーク・人間関係はどうでしたか。(記述)
- 5-1. CTと,話す機会がありましたか。(5段階尺度による選択)

13. 最後に,このSPを振り返って,何かコメント・意見・感想があれば教えてください。(記述)